なぜ英語が話せないの

会話上達法＝第三部

〈37〉

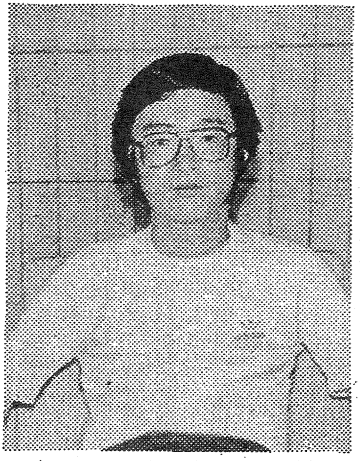
細かな表現力の向上を

日本と欧米の 小説の乱読も役立つ

洗剤（detergent）ねじ回し（screw-driver）押しピン（thumb-tack）懐中電灯（flash light）靴ヒモ（shoe-lace）…。語学に強いはずの留学生が米英で生活してみて、最初に困るのが、これら日常用品の単語。バッテリーに補充する蒸留水は「バッテリー用の水」でも通じるが「distilled water」と注文するのが一般的である。

田中睦福島高校教諭（こ）は大学時代、サンフランシスコに一年半、滞在した経験をもつが、同じ“苦痛”も味わった一人。

「生活必需品の単語を知らず、不便極まりない。仕方なく一週間スーパーに通い詰めて、知らない商品名（単語）を片っ端からメモしたんです。そしたらゆうにノート一冊分になって…。自分でも驚きました」



細かな気くばりが必要と語る田中先生

次に閉口したのがスラング。特に相手が興奮した際に、意味不明の表現がポンポン飛び出す。ケンカの途中で「ちょっと待て。それは何のことだ」と聞き返したことも。ヒッピーと付き合い、スラングを頻出する映画を一日中見るなど、欠点の克服に努めた。

田中先生は帰国後、合格率三―五％の難関である「英検一級」にパス。米国で皿洗いをしながらの苦労が実って、キャンパスだけでは学習出来ない広範囲な会話力も身につけた。

ところが、久しぶりに再会したカナダ人宣教師が、自分の靴を脱いで靴ヒモをほどき「英語で説明しながらヒモを元通りに戻せ」と命じた。

「ヒモの端を握って、靴の小さな穴に通し、引っぱり、さらに…という具合で、意外に難しいんです。満足な回答が出来ないでいると、外国語のマスターはかゆい所に手の届くようなキメの細かなものでないと不十分と言われ、再び自信喪失に陥りました」

苦い体験から、田中先生は英会話の上達法について、こんな具合に話している。

中学校時代は、テキストを一日も欠かさず一課から習った所まで大きな声を出して読む。これだと暗記する気がなくても、反復練習の成果で全文がスラスラ口に出るようになる。

高校では、時間があれば英会話クラブに在籍すること。文化祭などで英語劇をやり、長い会話を覚えるよう努力する。テープなどを使い、日本語にない英語独特の発音を学ぶ。

大学では、外人講師や友人などから良い意味での刺激を受け、敏感に自己啓発に取り組むことが大切。言葉は感受性であり、常に英語の表現に神経をとがらせておく。例えば「素晴らしい」「美しい」といった形容詞の代わりに、これらの形容詞の内容をリアルに表す動詞を使えれば、それだけ生きた英語になる。動詞の活用はもっと考えてよい。

田中先生は大学時代、日本と欧米の小説（日本語訳）を乱読して、発想法の違いを勉強したのが役立った、とも指摘している。語学には、こうした細かい気くばりが欠かせない。